妻科の家

田中冬二

東京文献

昭和四十五年七月二十日第一刷

妻科の家

定価 八五〇円

著者 田中冬二©

発行者 初澤甚四郎

印刷者 小林周治

製本者 飯塚俊秀

装幀者 楢原祥太郎

東京都千代田区飯田橋三の六の八
高橋ビル 郵便番号一〇二
東京文献センター
振替口座東京一七四三〇
電話 二六三一〇九六一

印刷／小林印刷(株)　製本／飯塚製本所

妻科の家　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

随筆

妻科の家……12
増富ラジウム鉱泉……17
野沢温泉……21
アッシュの杖……25
川治温泉　三里ヶ原　小河内……30
糸魚川の床屋……35
土岐の犬……40
柏崎と宇奈月……43
黄梅雨抄……47
虎の門異聞……51
宿命……55
立春大吉……65
古手紙……67
水の話……69

冬至……71
昼寝……75
立春まで……78
いろはかるた……81
四宮雨軒……87
幼年の日……102
哀歌……111
徽山の麓に眠る詩人……115
佛への道……127
小網町……134
吉野の鮎他……138

詩

元旦……144
春の歩み……146

山の見える町の西洋料理屋にて……148
七月……151
鯰……153
夏雲……155
安土……158
高原……160
ローカル線にて……162
友情……165
秋の佳日……167
秋……172
冬霞……173
桑酒……175
冬の日……176
冷めたい夜着の襟に明日を……177
秋風の歌……181

帰郷……183
詩人……185
鰻……186
秋冷……188
薔薇の花……189
豆を煮る……191
ジブラルタルへ……194

感想

オレンデの匂い……198
高邁なる詩精神と深い思索……203
実存を追求する虚心の姿……205
山の本 Ⅰ……211
山の本 Ⅱ……214
十勝日誌……217

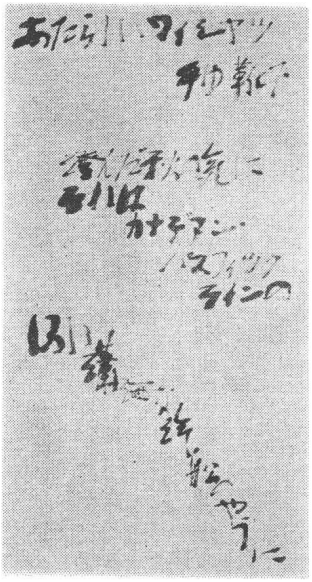
ゆずの花、牡丹鍋、クリスマス・ローズ……224
ゲルマン風の意匠……230
湖畔の絵……233
現代俳句鑑賞 Ⅰ……236
現代俳句鑑賞 Ⅱ……245
セレニテの詩人……252
序文 Ⅰ……257
序文 Ⅱ……260

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

妻科の家

随

筆



妻科の家

善光寺の町。長野の妻科。

その妻科の家。

蔦が表の壁いちめん覆っていた家。夜はその葉の中に、燭光の弱い軒燈が一つぽつんと點った。門の外に桜の木が五六本並んでいて、その中に鬱金桜が一本まじっていた。二階からも階下の座敷からも山が見えた。台所がたいそう広くその板敷には、いつも大門町の吉野屋の酒桜奈美があった。その台所は風通しがよいので、夏になると板敷に花莫蓙を敷いて、そこで食事をすることにしていた。

家の周辺には小さな牧場、氷室、長野商業のグラウンド、葡萄園、林檎園、塩の湯と言う鉱泉宿、戸隠鬼無里(きなさ)への古い街道、吊り橋、水力電気の発電所等があって、牧歌的情緒がたっぷりで、私にツルゲネーフやビョルンソンの作品を連想させた。

長野はあんずの花が四月の二十頃、林檎の花が五月の八十八夜前後がさかりで、葡萄の伸びか

けた蔓がほんのりと、紅を含んだ新芽を見せるのもそのころだ。そうした中に麦の穂も出揃い、千曲川には赤腹と呼ばれた鮠が捕れはじめる。このころ千曲川の向い方、長野電鉄の河東線の山沿いの保科の清水寺は牡丹の花ざかりで、その花見の人に賑わう。

このころが長野では一年中でいちばんよい季節なのだ。そうしたころの夕暮のひとときを、私は屢々夕食までの間を、懐手のままで家の近くを彷徨うた。山の影にはやくも翳つた長野商業のグラウンドを右に、裾花川の吊り橋の方へゆく。やがて吊り橋の袂に来ると、橋の向う切りたてたような山の真下に、橙色の瀟洒な発電所が煌々と點している。私はゆらゆらとゆれる吊り橋の上、太い針金につかまりながら、脚下の凄じい奔流をしばし見入ったり、或は川べりの石に腰をかけて、上流の柵や鬼無里の山村に、浪漫的の思いをひとり走らせたりした。そんな時だった、私はふと向うの道に、私の幼い子供—次男と三女の姿を見た。二人は連れだって私を迎えに来たのだ。気づいて立ちあがった私に、彼等はいっさんに駆けよって来た。私は彼等二人の手をひいて、夕飯の用意の出来た家へ急いだ。そんなときの私の心はこよなくたのしかった。夕飯の後のひとときを、私は子供らと、障子の桝組と豆腐とどっちが大きいか等、たわいない問答をした。それからまた咄嗟に思いついたままの童話をきかせたりした。たとえば戸隠の狸が人に化けて馬に乗って善光寺の町へ来て、お菓子屋へ饅頭を買いにはいり、お金はと言われて、木の葉を出してたちま

ち化けの皮があらわれたというような話。

林檎やマルメロ花梨等の果樹の花が終り、アカシヤの花も散りしくと菜種刈りとなる。そして六月になるとさくらんぼの実が熟れはじめる。このころになると夜明椋鳥の騒がしい声に目を醒まされる。籬の外の綿畑の中に一本のさくらんぼの木があって、それを目ざして椋鳥の群は暗い中からやって来るのだ。さくらんぼの木の梢には椋鳥の襲来を防ぐため、おどしの赤い布が結んであるが、それがひらひらした位では何にもならぬようだ。兎も角夥しい椋鳥の群だ。そうしている中に南風が吹いて雨期に入る。

東京から赴任して来た私達の一家だ。長女は長野高女の転校も幸叶つた。長男は長野商業の入学試験に合格した。五歳の次男は近くの牧場の子と、すっかり仲よしになって、一日中紫外線のつよい外で遊んで真黒になっていた。三歳になったばかりの三女は、いつの間に階段を二階の書斎へ上って来たのか、不意に背後から私の肩に小さい手をおいて私を驚かした。——おい、危いではないか、と私は階下の妻に怒鳴った。東京から連れて来た女中は愚図だが忠実であった。そして使い走りが好きであった。それで私の家では桜枝町の一心堂へ大福餅を、金井川の今村へ蕎麦の玉を買いにやった。その桜枝町だ。戸隠から朝も暗い中をたって来た馬が、一膳飯屋の前につ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.